

府立羽曳野支援学校

校長 中村 昌子

平成 29 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

児童生徒一人ひとりの個性と可能性を大切に、「楽しく学び、ともに育ち、豊かに生きる」教育の実現を図る。さらに、支援学校のセンター機能の発揮をめざし、地域の学校や関係機関と連携し、入院中だけでなく日常的に病気の子どもたちへの支援をおこなう。

○よりよく生きるための知識と理解を培う。

自分自身の病気に対して正しい知識を持ち、病状等を理解することにより、心理的に安定し病気を自己管理する力や病状に即した生活習慣を形成する態度とよりよく生活しようとする意欲を育てる。

○学ぶ楽しさと学ぶ意欲を高める。

興味・関心・得意な分野等を自ら発見し、すすんで学習することによって得られる喜びをとおして、学びを大切にする態度や意欲を高める。

○社会に積極的に参加し、自己実現をすすめる。

多様な体験を通して、コミュニケーション力やソーシャルスキルを身につけ、地域社会で周囲の人々とともに、積極的・自主的に活動し、自己肯定感を高め、自己実現をめざす意欲を培う。

「病気であること」「病気であったこと」を自己実現の学びの場ととらえ、それらを糧として成長する力を養う。

2 中期的目標

1 児童生徒一人ひとりの状況に合わせた学力向上と病気の自己理解による自立・自己実現への取組みの充実

- 自立活動や総合学習を活用して病気の自己理解を進め、退院後の家庭や地域校での生活に積極的に参加できる力を育成する。
- これまでの取組みを合理的配慮の観点から見直すとともに、児童生徒の実態に応じた学習等の目標及び内容、評価方法の検討、個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成と活用の充実を図る。また、児童生徒の特長を伸ばす支援体制の確立をめざす。
- 長期欠席による未学習部分を補い基礎学力の定着を図るとともに、円滑な復学に向け地域校との連携に努める。また、不足しがちな実験や観察などの体験的学習を補うため、各教科等でICTを活用した授業実践を進める。
- 児童生徒理解及び人権の擁護、保護者支援、個人情報の保護等、児童生徒が安心して学校生活を送り、自らの生き方を考えていけるよう、計画的・継続的に教職員研修を実施し、教職員の資質向上を図る。
- 各種病弱教育研究会への実践発表に取組むことにより病弱教育の専門性を高めるとともに、保護者や病院関係者等との信頼関係を構築できる若手教員の育成を図る。

2 小・中で連続した、病弱支援学校としてのキャリア教育の推進

- 中学生の進路支援において、学校全体のシステムを確立し、児童生徒一人ひとりのニーズに応じた進路指導に取組むとともに、高等学校等との連携を図り進学後の支援についても連携体制を整える。
- 地域校におけるキャリア教育と連携し、復学後、スムーズに教室に戻れるようにするとともに、病気のある児童生徒の将来を見据えたキャリア教育について検討し、よりよく生きる力を育成する。

3 継続支援及び地域連携体制の充実

- 保護者や前籍校及び医療と計画的なケース会議を実施し、適切な学習指導・生活指導・保健指導について四者間で共有することにより、入院時から退院後、進学後までの継続した支援を行う。
- 地域連携部を中心に、地域社会で医療を必要とする児童生徒や本校に在籍した児童生徒の退院後の教育相談をさらに推進する。
- 病弱教育の理解を深める広報活動について、ホームページやリーフレット等の作成と配布並びに広報紙などを活用し、地域で生活している病気のある児童生徒へ教育支援を行う。
- 「教育コミュニティ推進事業」を活用し、地域に対して「学びの場」の提供をおこない、支援学級との連携や病弱教育の理解啓発につなぐ。
- 安全安心な学校づくりを目標に、病院と連携した防災教育の充実を図る。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 29 年 11 月～実施分]	学校協議会からの意見
<p>○対象：児童・生徒、保護者、医療関係者、教職員 方法：1か月以上の在籍者に随時実施（前年比：△増加、▼減少） 回収率：児童・生徒 98.9%（△ 9.2P） 保護者 92.6%（△13.5P） 医療関係者 92.8%（△13.1P） 教職員 100%（△ 2.6P）</p> <p>【学校生活等】 ・「学校が楽しい」という項目においては、児童生徒 82.5%（△5.6P）、保護者 91.3%（▼1.0P）、医療関係者 92.2%（△5.8P）と高い値を示しているものの、児童生徒の約 2 割がそう思っていないことを真摯に受け止めなければならない。また、授業に対する評価では、「分かりやすい」と答えた保護者が 97.6%（△ 1.8P）であったのに対し、児童生徒は 88.8%（▼3.5P）であった。児童生徒が「分かる授業」を実感できるよう、より一層授業力の向上を図っていききたい。</p> <p>【生活指導等】 ・「防災・安全教育」についての項目で、児童生徒が 48.8%（▼7.0P）、保護者 90.0%（▼2.3P）と肯定的評価が減少しており、教職員においても 79.1%（▼5.1P）という結果であった。学校の特質上、在籍期間中に防災・安全学習が計画されていない場合もあるが、大規模災害が想定される中、少なくとも対応や避難については、保護者・医療関係者とともに共通認識を持つ必要がある。</p> <p>【医療との連携】 ・医療との連携について、肯定的な評価が 84.9%（△10.6P）と昨年度よりも増加した。病棟との連携は非常に大切であり、相互の理解が少しずつ進んできたものと考えている。今後も児童生徒が安全に安心して授業を受けることができるよう連携を進めていきたい。</p>	<p>第1回（7/14） ○ キャリア教育の推進 ・将来のために今のつらさ、しんどさを乗り越えるという視点ではなく、今を充実させることが将来の目標につながっていくという視点で考えることが大切ではないか。 ・子どもがやりたいことを、教員がすべて受け止めるのはたいへんである。キャリア教育として、そこだけを指導することにならないよう教員の余裕が必要。 ○ 災害時の対応 ・病棟と連携した防災計画が必要。認識の異なる部分がないよう確認すること。 ○ 個人情報保護及び備品管理 ・徹底すればするほど報告件数は増えるが、ヒヤリハットでとどまることが多い。チェックを怠らないようにすることが大切。</p> <p>第2回（10/25） ○ 修学旅行について ・施設の確認やアレルギー対応など、大事なポイントがある。業者選定も大切である。 ・修学旅行は子どもたちにとって重要な行事である。その行事を通して、子どもたちが何を身につけるか、どのような成長をするかが大切。付き添い者数はそのためと、とらえられる。 ○ 20周年式典及び平成 29 年度学習発表会 ・全校プロジェクトの映像を見たが、各分教室の特色もあり、全校がつながっている感じがした。</p> <p>第3回（1/30） ○ PTA活動について ・他校とはニーズが異なる。保護者が安心できる場・保護者と子ども、教員が楽しい時間を過ごせる活動がいいのではないか。 ○ 退院後のフォローアップについて ・病気のことについて理解してほしいということ、復帰する学校に積極的に発信することが大切。</p>

府立羽曳野支援学校

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
学力向上と自立・自己実現の取組み	<p>(2) 児童生徒の実態に応じた個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成と活用の充実を図る。また、児童生徒の特長を伸ばす支援体制の確立をめざす。</p> <p>ア 個別の教育支援計画・個別の指導計画のより有効な記載について検討する。</p> <p>イ WISC-IVや新版K式等を活用し、児童生徒の特長を伸ばす支援を行う。</p> <p>(3) 基礎学力の定着及び実験や観察などの体験的学習を行う</p> <p>ア 休業中の補習と ICT を活用した授業の推進</p> <p>イ 読書活動の推進</p> <p>(4) 児童生徒の個人情報の保護、安心安全な学校づくりの展開</p> <p>(5) 病弱教育の専門性を高めるとともに保護者や病院関係者等との信頼関係を構築できる若手教員を育成する。</p> <p>ア 府内及び他府県の病弱支援学校と連携し、教員の専門性向上を図る。</p> <p>イ 国の研究への協力</p> <p>ウ 若手教員の授業力やコミュニケーション力の向上を図る。</p>	<p>(2)</p> <p>ア 保護者や地域校への説明の充実を図るため、1学期に自立活動部を中心に個別の教育支援計画・個別の指導計画の記載を見直す。</p> <p>イ WISC-IVや新版K式発達検査等も活用して、児童生徒の特長を伸ばす支援を行う。また、そのための教員研修を実施する。</p> <p>(3)</p> <p>ア 入院中の児童生徒の基本的な生活習慣の確立と基礎学力の向上をめざし、休業中の補習を行うとともに、ICTを活用した授業を行う。</p> <p>イ 平成28年度より実施している蔵書整理を進め、本校と分教室との相互貸し出しのシステムを検討するとともに、児童生徒の読書に対する意欲を高める読書企画を実施する。</p> <p>(4) 各部署の教職員間で情報・課題を共有し、児童生徒が安心して安全に学校生活を送れるよう学校運営を図る。</p> <p>(5)</p> <p>ア 全国・近畿等の病弱教育研究会に参加するとともに、実践発表を通して情報共有・情報交換を行い、教員の専門性の向上を図る。</p> <p>イ 国立特別支援教育総合研究所では、平成29年度は心身症のある児童生徒への支援に関する調査研究(2年間)を行うこととしている。その研究に協力し、先進的な支援について学ぶとともに、教育実践に活かしていく。</p> <p>ウ 校内での取組みとして、研究授業を実施し、教員が互いに学びあう機会を計画的に設ける。さらに、若手教員のコミュニケーション力向上に向けた校内セミナーを実施する。</p>	<p>(2)</p> <p>ア 1学期に自立活動部での見直しを行い、2学期に全校で共有する。</p> <p>イ 5月に教員研修を実施する。検査を実施したすべての保護者に対し検査の結果を説明する。</p> <p>(3)</p> <p>ア すべての部署で夏季・冬季休業中に各1週間程度の補習及びすべての部署でICTを活用した授業を実施する。</p> <p>イ・蔵書整理(夏季休業中～)及び相互貸し出しシステムの実施に向けた図書台帳の整理。</p> <p>・読書活動推進委員会を中心に群読や一言感想等の企画を実施。</p> <p>(4)・全部署で、持出し簿の確認・文書発送時のダブルチェックを継続実施</p> <p>・ヒヤリハット、事故・トラブルが発生した場合に全教職員が対応できるよう仮想事例で検討(年間3回)</p> <p>(5)</p> <p>ア 各種研究会での発表評価 全国病弱虚弱教育研究連盟研究大会(8月)において実践発表(自立活動1名)。大阪病弱教育研究会幹事校として総会・研修会を開催(8月)</p> <p>イ 年間2回程度予定されている研究協議に参加し(1~2名)、今年度は研究協力及び情報収集を行う。</p> <p>ウ 教員研修(年間3回:人権・合理的配慮・授業力向上) 研究授業(初任者全員) 若手教員の教員力向上に向けた校内セミナー(年間5回)</p>	<p>(2)</p> <p>ア 年度当初、記載についての見直しを行い、質的向上を図ったが、ケースによって違いが出てきたため、再度検討を行った。児童生徒への支援に真に役立つものとなるよう改善に努めたい。(△)</p> <p>イ 指導教諭を講師として校内WISC-IVセミナーを実施(6月に全校研修、個別研修全5回30名)。検査結果のフィードバック(100%)。児童生徒が受けることの多い検査について知っておくことは重要であるため、今後も研修に努めたい(○)</p> <p>(3)</p> <p>ア 中3生を中心に全部署での補習を実施するとともに、ICTを活用した授業を行った。また、分教室と地域の小学校をつないだ交流授業を行うことができた。交流授業を実施するには様々な課題があるが機会を活かしていきたい。(○)</p> <p>イ 分教室の移動等で蔵書管理はあまり進んでいない。部署ごとの企画だけでなく、全部署が関わる読書活動に取り組んでいきたい(△)</p> <p>(4)</p> <p>・ヒヤリハット等については全校で共有し問題点の確認を行ったが、事例検討は部署毎での検討になった(年間1~2回)。記録やダブルチェックに漏れないよう確認の機会を増やしていきたい。また、府教育庁よりの情報を基に、全教職員に注意喚起を行ってきたが、それぞれの問題点を自分のこととして捉えられるよう啓発を行っていく。(△)</p> <p>(5)</p> <p>ア 全国病弱虚弱教育研究連盟研究大会での実践発表、大阪病弱教育研究会総会・研修会ともに好評であった。(○)</p> <p>イ 若手教員が中心となって進めており、研究協力を通して先進事例に触れることができた。(○)</p> <p>ウ 全校教員研修を年間3回実施。全教員が合理的配慮を授業に活かすという視点を持つことができた。校内セミナーはOJTが中心となり、計画的に進めることができなかった。社会人マナー等についてはまとめて研修する必要がある。(△)</p>
キャリア教育の推進	<p>(1) 中学生の進路支援において、児童生徒一人ひとりのニーズに応じた進路指導に取り組む。</p> <p>(2) 病気のある児童生徒の将来を見据えたキャリア教育の検討</p>	<p>(1)</p> <p>ア 中学生の評価・評定に関する変更から3年目となり、中学のすべての学年が新システムになる。それに伴い、これまで進めてきたシステムをまとめマニュアルを作成する。</p> <p>イ 転入当初より地域校と評価・評定について十分な話し合いを行い、生徒の負担軽減に努める</p> <p>(2) 地域校のキャリア教育について知るとともに、病種によって将来必要となる生活の在り方が異なるため、部署を横断しての検討を行う。</p>	<p>(1)</p> <p>ア 新システムに合わせたこれまでの資料をまとめ、進路支援マニュアルを作成する。(1学期)</p> <p>イ 地域校と確認するべき内容を統一し、計画的に進路懇談を実施。(全中学生)</p> <p>(2) 地域校で行われているキャリア教育の内容をもとに、進路支援部を中心に検討を行う。</p>	<p>(1)</p> <p>ア これまでの資料を全部署で共有することができた。進路支援を円滑に進めることができた。(◎)</p> <p>イ 教頭が中心となって地域校との確認を行った。今後は児童の評価評定についても充実を図っていきたい。(○)</p> <p>(2)</p> <p>進路支援部でキャリアプログラムの検討を行った。今後、実際の学習の中で具体化していきたい。また、学校協議会委員より貴重なご意見をいただくことができた。ご意見を踏まえ今後も検討を重ねていきたい。(○)</p>

府立羽曳野支援学校

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">継続支援及び地域連携体制の充実</p>	<p>(1) 入院時から退院後、進学後までの継続した支援の充実を図る</p> <p>ア 計画的なケース会議の実施</p> <p>イ 退院・卒業後の状況の把握</p> <p>ウ P T A行事の推進</p> <p>(2) 地域社会で医療を必要とする児童生徒や本校に在籍した児童生徒の退院後の教育相談をさらに推進する。</p> <p>(5) 安全安心な学校づくりを目標に、病院と連携した防災教育の充実を図る。</p>	<p>(1)</p> <p>ア スムーズな復学に向け、保護者、医師、地域校との連携のもとケース会議を行い、児童生徒に合わせた支援を行う。</p> <p>イ 退院、卒業後の状況を把握し必要に応じて支援・助言を行う。</p> <p>ウ 入院中の児童生徒は家族と過ごす時間が短いため、P T A行事を充実させ、保護者と児童生徒が共に過ごせる機会を作る。</p> <p>(2) 病弱教育の社会的認知が依然として低いことから、広報活動、教育相談活動を進め、理解促進を図る。</p> <p>(5) 病院によって防災計画が異なるため、各部署で病院の防災計画を把握し避難訓練を行うとともに、災害時の全校での安全確認等を理解し適切な行動がとれるようにする。</p>	<p>(1)</p> <p>ア 医師と連携し、在籍中に地域校等への試験登校を実施（実施率90%）</p> <p>イ 退院・卒業後の状況調査90%実施</p> <p>ウ 各部署で年間2回以上、P T A交流会等を行い、評価アンケートで満足度90%以上をめざす。</p> <p>(2)・市町村への広報（5市）</p> <p>・病院と連携したセミナーの実施（年間5回）</p> <p>(5)</p> <p>・年度当初に災害時の対応について全校職員会議で確認</p> <p>・病院の防災計画の確認及び避難訓練の実施（全部署）</p>	<p>(1)</p> <p>ア 医師の診断に基づいた試験登校（55件100%）により、円滑な復学につながった。（◎）</p> <p>イ 地域校への退院後アンケートによる状況調査は26件（34.2%）と少なかったが、通院時の確認で状況の把握を行った。状況把握に向けたシステムの整備が必要である。（△）</p> <p>ウ 活動の満足度は100%であったが、保護者間交流は73%と低かった。（○）</p> <p>(2) 5市に広報を行うとともに、市町村担当指導主事会において説明を行った。今後は小中学校への広報を検討する。病院との連携セミナーを5回実施。いずれも好評であった。（○）</p> <p>(5) 災害時の対応は常に心掛ける必要がある。さらに、保護者との確認を入級時に行うことで確実にしていきたい。（○）</p>
--	--	---	--	---